
バカと彼女と召喚獣

オーランチキチキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと彼女と召喚獣

【Nコード】

N3714Z

【作者名】

オーランチキチキ

【あらすじ】

「いやだ！テストなんか受けたくない！！」

天才兼バカの水樹夏目は叫んだ。

あるトラウマからテストを受けたがらない彼女はFクラスの面々と過ごしてゆくことで、少しずつ成長していくのだった。

予習問題

いつからだろうか、テストが嫌いになったのは・・・

いつからだろうか、まともに授業を受けなくなったのは・・・

私は他人より頭が異常に良かった。だから年齢に似合わない点数を叩き出したり、問題を軽々と解いていた。

ただそれだけだったのに・・・

いつの間にか私は私を妬んだ奴だけになって、壮絶ないじめに遭っていた。

「カンニング犯」

「卑怯者」

「不良」

そんな称号が勝手に私に付きまとい、子供だけではなく大人達にもそんな風に見られていた。

私の実力なのに・・・

だから私はテストを受けるのをやめた。授業を受けるのをやめた。

第1問

私が高校に入って2度目の春。

今年の春は暖かく、春一番が見事に咲かした桜の花を舞い散らす。
そんな気持ちのいい朝に私は・・・

「遅刻だ、水樹」

暑苦しく気持ち悪い西村先生（通称：鉄人）に会っていた。

「お、おはようございます鉄・・・西村先生」

「おはようではないだろう、それよりお前は言うべきことがないのか？」

はて、挨拶以外に鉄人に言うべきこと……。ああ、あれか！

「今日も暑苦しいですね、鉄人」

私の頭部に拳骨が降った。

「お前は遅刻の謝罪より教師の罵倒なのか！それと西村先生だ」

「いったあ！か弱い乙女に何するんですか！？」

この暴力教師め！女の子に手を出すなんて・・・

「お前は例外だ。全く、去年から吉井と坂本と3人でどれほど悪事をこなして来たと思ってるんだ？」

さーて、私は去年何をしたかなあ……。とりあえず尋常じゃない

数の騒動&事件を起こしてきたきがするなあ。

「大体お前に女性だという認識があるならまず服装から直して来い」
「これはスカートがどうしても嫌だから学園長に頼み込んで着させてもらってるんです！」

どういう訳か私は幼少期からスカートという物がどうしても好きになれず、生まれてこの方（例外を除いて）ズボン類で暮らしている。

「はあ、まったく……。まあいい、これはお前へのプレゼントだ」
鉄人は大きくため息を吐いて、持っていた箱から二つの封筒を取り出す。

「えーと、クラス振り分けテストの結果と……。もうひとつは何ですか？」

「いいから開けてみる」

半信半疑（というより無信全疑だが）で封筒を受け取る。封筒には両方とも『水樹夏目』と私の名前が書いてある。

「こっちはクラス分けか、結果は……。まあFか」

こっちは大体予想できていた。だってテスト受けてない（つまり0点）からね。

そしてもうひとつの方は……

『水樹夏目』

以上の者を観察処分者とする』

「なんで！？なんで私が明久と同等の扱い！？」

いくらなんでも重過ぎる処罰だと思う。てか何の処罰だこれ？

「今回のクラス振り分け試験の結果から今朝の職員会議で満場一致で可決された。テストを受けないんだから当然だ」

そんなぁ・・・

「それとだ、学園長がお前のことを呼んでたぞ、至急だそうだ」

その上クソババアからの呼び出しか……。どうやら私は今年ツイてないらしい。

こうして私の（初っ端から）最悪の学園生活が始まった。

第2問

「失礼しまーす」

返事が返ってくる前に学園長室のドアを開ける。

「普通は返事が返ってきてから開けるもんだがね」

解ってますよ、ワザとです。

さて、職員室には呼び出しの常連の私だけど学園長室には数回しか来たことがない。何を言われるのか・・・

「アンタのことなんだがね、どうしてもテストを受けないつもりかい？」

もしや退学の危機が迫ってるのだろうか？

「アンタがこのままテストを受けないままだったら退学つてのも十分にあるさね。しかしアンタはこの学園にトップで入学した生徒だからねえ、できれば退学なんてしてもらいたくないんだよ」

そう、私はここの入試の時に本気を出して見事トップで入学している。つまりやればデキる子なのだ。

「・・・考えておきます」

「そうしておくれ、アンタからはいいいデータがとれそうだからねえ」

データ？何のことだろう？

「話はそれだけさ、とつととHRに行っちゃいな」

自分から読んでおいてなんて扱いだ。そう思ったが口には出さず、一応作り笑顔で退室する。

テスト受けなかったら 退学かぁ・・・

「とんでもない事になったな・・・」

そう呟いて私は教室に向かうのだった

ここ文月学園にはクラスがA～Fまで6クラスある。

Aから順に成績がいい者が収まり、それに伴ってクラス設備も高級な物になっている。

さつき通りかかったAクラスはホテル並みの豪華さを誇っていたが、我がFクラスとなると・・・

「なんだこの汚さは・・・」

もはや廃屋と言ふべき設備だった。

壁はヒビと落書きだらけで逆にそれらが無い所を探すのが苦労する具合で、窓ガラスは割れている。

「しょうがない、慣れていくか」

自分に言い聞かせるように呟き、教室に入ると・・・

「「ダァーリィーン!!」」

何故かクラス全員（一部除く）が合唱していた。

え？これは何ですか？

状況に私が追いつけないでいると、席（といっても卓袱台だが）で立っていた気分悪そうな男子生徒が

「・・失礼。忘れてください。とにかくよろしくお願いします」

と言つて着席する。

えーと、これは自己紹介の途中なのかな？

すると果然とする私に聞き覚えがある大人しいオッサンの声が呼びかけてくる。

「えーと、水樹さんですね。自己紹介の途中なのであなたもお願いします」

去年国語の授業でお世話になった福原先生だ。去年は鉄人だったが、今年の担任は福原先生か。

「あ、はい。水樹夏目です。よく近藤アリカさんと間違えられますが別人です。よろしくお願いします」

とりあえず無難に自己紹介を済ませてしまふ。ちなみに近藤アリカとは巷で人気の声優アイドルで、ぶっちゃけ私だ。ただ面倒なことが起きては欲しくないのも、その事は隠している。

とりあえずこの場の空気に空いている席に落ち着こう。えーと・・とりあえず後ろの席が空いてるからそこに座ろう。

どうやらこのクラスは私の顔見知りが集まっているようで、吉井明久・坂本雄二・島田美波・木下秀吉・土屋康太・須川君（下の名前覚えてない）etc・・・と懐かしい面子がそろっていた。

「よう夏目、お前もこのクラスか」
「テスト受けなかったからね」

席に座ると早速声が掛かる。

喧嘩慣れした身体にツンツンの髪の毛、坂本雄二か。

「それにしても野郎ばっかのクラスだね」
「しょうがないよ、Fクラスだから」

今度は学園一のバカの吉井明久が話しかけてくる。まあ、私もその称号を貰ってしまったのだが・・・

「ま、今年もよろしく」

淡々と意進む自己紹介の作業の中、3人でお互いクラスが一緒だったのを若干ながら安心していきなり教室の扉が開いてとある女子生徒が入ってくる。

「あの、遅れて、すいま、せん・・・」
『え?』

どこと無く教室中からそんな声が聞こえた気がする。

まあ、驚くのも仕方ないか。だって・・・

「あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします・・・」

このクラスに似つかわしくない綺麗で賢い女子生徒がそこにいた。
ここ、笑う所?

そう皆が驚いた声を出したのは他でもない。姫路さんは成績が良く、Fクラスに居るべき人材ではないからだ。

これは今年は本当に面白くなるかもしれない・・・

第3問

「はいっ！質問です！」

彼女が自己紹介を終えた直後、男子生徒が高らかに挙手して質問する。

たぶん他の奴らも挙手しないだけで、同じ疑問を抱いているだろう。

「なんでここにいるんですか？」

場合によってはものすごく失礼に聞こえる質問だ。しかし、これが（私含めて）クラス全員の疑問なのだ。

しかし姫路さんはそんな質問に怒りはせず、むしろ緊張した面持ちで質問に答えてくれた。

「そ、その……。振り分け試験の最中、高熱をだしてしまいました……」

なるほど！と言った具合にクラスの奴らは頷く。本当に分かってるのか？

文月学園はテストに関しては寛大な心を持ち合わせていないらしく、私のような受けたくない奴も姫路さんのような受けられなかった人も平等に0点扱いにする。そう思うと姫路さんは可哀相だなと思えてくる。

しかしFクラスの野郎共は姫路さんの言い分を聞いて……

『そう言えば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ。科学だろ？アレは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとう』

と、言い訳を言い出した。想像以上のバカばかりだ。

「で、ではっ！一年間よろしくお願いしますっ！」

そんな中、逃げるように姫路さんは明久と坂本の間の席に着く。因みに私は明久の隣（姫路さんの反対側）だ。

「き、緊張しましたぁー・・・」

よほど緊張したのか、姫路さんは卓袱台に突っ伏してしまった。明久、話しかけるなら今だよ？

「あのさ、姫・・・」

「姫路」

明久撃沈。

ワザとだろうか、明久の声にかぶるように坂本が姫路さんに声をかける。

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む」

「あ、姫路です。よろしく願います」

深々と頭を下げる彼女。この丁寧さや育ちの良さは昔からかわらないなあ。よし、私も！

「あのさ、姫・・・」

「姫路さん！お久しぶり！！」

明久が血涙を流しながらこっちを見ているが気にしない。

「あ！夏目ちゃん！お久しぶりです」

「なんだ、知り合いだったのか？」

雄二が意外そうに質問してくる。

「うん、小学生ころだったかな？同じ塾にかよってさ・・・」

ヤバイ、魔の弁当を思い出した。

ここは話題を変えてこれ以上思い出さないようにしよう。

「そ、そう言えば姫路さん体調はもうだいじょうぶなの？」

「あ、それは僕も気になる」

このタイミングで明久が口を挟んでくる。そして明久の顔を確認した姫路さんは

「い、吉井くん！？」

驚いていた。

さては明久の顔があまりにも酷いから驚いてしまったな？

「姫路。明久がブサイクですまん」

「ほら明久、驚かしたんだから誤りなよ」

悪いことをしたら謝る、これ基本だよな。

「そ、そんな！目もパツチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！その、むしろ・・・」

「まあ、見てくれは悪くないような気がしない事も無いね」

「ああ、俺の知人にも明久に興味を持っている奴がいたような気がするし」

「え？それは誰・・・」

「そ、それって誰ですか！？」

この雄二の発言に食いついたのは意外にも姫路さんだった。さっきの擁護（？）と言い、この食いつきと言い、もしかして姫路さんは明久の事が好きなんだろうか？

「確か、久保・・・」

久保？女性で久保っていたっけ？

「・・・利光だったかな」

久保利光 ↓ ♂

「・・・」

「明久、声を殺して泣くな」

一応フォロー（？）を出しておこう。成っているかどうかは知らないけど。

「半分冗談だ。安心しろ」

「え？残り半分は？」

あれ？冗談だったの？久保君が同性愛者なのは知っていたけど・・・

「ところで姫路。身体は大丈夫なのか？」

「あ、はい。すっかり平気です」

「ねえ雄二！残りの半分は！？」

「明久ウルサイ！！」

明久が騒ぐのでとりあえずわき腹にエルボをかましておく。

「はいはい。その人達、静かにしてくださいね」

ち、明久のせいで先生に警告されたじゃないか。って、先生がパンパンと教卓を叩いたら教卓が粗大ゴミになったぞ！どんだけ設備悪いんだこのクラスは！？

「えゝ・・・替えを用意してきます。少し待っていてください」

先生は気まずそうにそう言つと足早に教室から出て行った。

第4問

「雄二、夏目、ちょっといい？」

明久にそう言われて廊下に出た3人、どうやら話にくい内容みただ。

「それで、話って？」

「この教室についてなんだけど・・・」

なるほど、『酷い』以外言いようが無いこのクラスか。

「Fクラスか、想像以上に酷いもんだな」

「夏目もそう思うよね？」

「そうだね、もはや廃屋だからね」

腐った畳に足の折れた卓袱台。これで勉強しろと言っのだから無茶苦茶極まらない。

「Aクラスの設備見た？」

「ああ。凄かったな。あんな教室他に見たことが無い」

「あれは教室なの？」

一方は廃屋、もう一方はホテル。これで不満を持たない奴はいないと思う。

「そこで僕からの提案。せつかく二年生になったんだし、『試召戦争』をやってみない？」

「戦争？」

「うん。しかもAクラス相手に」

さて、明久は何が目的か……。たぶん明久のことだ、姫路さんの為に設備をAクラス並にしてあげたいと思ったのだろう。

「はあ、姫路さんの為……。だよね？」

私がそう言つと明久がビクツツと背筋を伸ばす。分かりやすい奴。

「本当にお前は単純だな」

「バカ」

明久の真意に気付いた以上私と坂本の目には警戒の色が消えうせ、代わりに楽しげな笑みが浮かんでいた。

「いいよ！私は協力するよ」

「え？いいの！？」

まあ、こっちも色々と事情があるし。どうせテスト受けないと駄目なら試召戦争の為にした方がいいと思う。

「ま、俺も試召戦争をやろうと思っていたとこだしな」

「雄二が？なんで？」

「世の中学力だけがすべてじゃないって、そんな証明を試してみたくな」

雄二のその言葉には何故か重みを感じた。昔何かあったのだろうか？

「それに、Aクラスに勝つ作戦も思いついたし……おっと、先生が戻ってきた。教室に入るぞ」

「はいはい」

「あ、うん」

「それでは自己紹介の続きをお願いします」

壊れた教卓をボロの教卓に替えて、再び自己紹介の作業が再開される。

「えー、須川亮です。趣味は……」

あ、須川君の下の名前って亮だったんだ。どうでもいい情報が手に入った。

そして自己紹介は坂本以外が終わって……

「坂本君、君が最後の一人ですよ」

「了解」

先生に呼ばれて坂本がゆっくり立ち上がる。少しもおどけていない、どこかクラス代表の貫禄を身に纏ったような気がするように思えてしまう。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

Fクラス代表……と言ったら聞こえは良いが、実態は下の上。つまり下だ。

「さて、皆に聞きたい」

坂本が教室を見渡す。

カビ臭い教室

古く汚れた座布団

薄汚れた卓袱台

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが……不満は無いか？」

『大ありじゃあっ!!』

二年F組生徒の魂の叫び。

「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

嘘付け、代表としてなんかこれっぽちとも思っていないくせに。とはいえ、さすが坂本だ。不満を煽ってクラスを試召戦争へと導く、カリスマ性のある程度回る頭が無いとできない技だ。

「そしてこれは代表としての提案だが……FクラスはAクラスに『試召戦争』を仕掛けようと思う」

Fクラス代表、坂本雄二は戦争の引き金を引いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3714z/>

バカと彼女と召喚獣

2011年12月13日11時57分発行